

活 動 報 告

維新の所沢を治めた葦山県・江川家 —ゆかりの伊豆の国市の史跡を巡る—バス旅行

- 活動日 令和元年 11 月 21 日(木)
- 時間 小手指駅南口 7:15 発、帰着 18:45
- 行先 伊豆の国市（葦山町、伊豆長岡町、大仁町合併）、三島市
- 参加者 21 名

■旅行先選定—講座をうけて—

1) 渡辺先生講座

昨年 6 月から今年 3 月にかけて 所沢市民講座「明治 150 年・維新期の所沢を学ぶ」と題して明治大学文学部名誉教授 渡辺隆喜先生の 6 回講座が開催された。その第 4 回目の講座「明治政府と入間・熊谷県」で慶応 4 年（明治元年）～明治 4 年 7 月を「府藩県三治の時代」と呼び、明治元年 6 月 武蔵知県事—山田一太夫（大宮・浦和県）、同武蔵知県事—松村忠四朗（品川県）と並んで葦山県 江川太郎左衛門が任命され、廃藩置県の明治 4 年まで所沢地域に葦山県が存在したことを教わった。葦山県は武蔵では多摩、所沢では西部の第 8 地区（勝楽寺、林、三ヶ島方面）まで含んで管轄されたようだ。葦山県は所沢市史のダイジェスト版「ところざわ歴史物語」の中に表組で示されている。

コース決定後の 8 月 1 日「渡辺先生を囲む座談会」講座のなかでも江川塾（洋式兵学、医学）が適塾、鳴滝塾と並ぶ幕末の三つの大きな私塾であることを聞き、一段と興味が高まった。

2) 木村先生講座

平成 29 年 2 月「武州世直し一揆」講座では講師木村立彦先生から所沢近辺に展開した一揆集団が東久留米付近において江川太郎左衛門配下の 3 名の鉄砲教示隊が組織する農兵隊によって撃ち殺されたり、召し取られたりしたことを教えていただいた。その時、江川太郎左衛門は皆さんの知っている人ではなく、その子息ですと話され、江川太郎左衛門は代々続いている名前であることを初めて知り、その歴史を調べてみたいと思っていた。

毎年恒例となったバス旅行の行先を葦山にしたいという話があがった時、講座の内容を確かめることを目標の一つに考えていたので、即座に賛成し、企画を具体化し、今回のバス歴史紀行となった。昨年はバス旅行先の選定では予め 3 つのプランを会員に提示し、それから一つに絞ったことと比べ、今回はスムーズに計画を進めることができた。

■見学先と当日の状況

1) 行程

①葦山反射炉（世界遺産） ②蛭が小島（源頼朝 流罰地跡）・・・昼食（食事処 代官屋敷）・・・③江川邸（江川家代々の代官所跡等）④葦山城（北条早雲の居城）⑤三嶋大社（伊豆一の宮）⑥買い物（ジャンボひものセンター）の順、遠くに行くので欲張った、盛りだくさんの企画であった。

調べていくとこの地域に歴史のさまざまな事柄がパックされていることが分かり、ますます興味をもって下調べに熱が入った。伊豆半島の付け根に相当するここは全国でも珍しく歴史が詰まっているとある本に書かれていた。

2) 事故渋滞 1 時間のロスを取戻し

当日は絶好の行楽日和に恵まれ、早朝集合の小手指駅南口からミヨシ観光のグリーンバスに乗り込み、一路、伊豆の国市へ向かった。途中の圏央道厚木PAまでの間で大きな事故渋滞に巻き込まれ、通り抜けるのに1時間ロスした。予定した見学・研修ができるかどうかの危機であったが、ドライバーTさんの機転により、曰く いきなりステーキならぬ“いきなり食事”で切り抜けることができた。また、葦山反射炉は歴史ガイド、江川邸もガイドを予め頼んでおいたが、バスの中から電話交渉し、両方とも時間変更を受け入れていただいた。運転しながらTさんは我々一行にダジャレを連発して和ませてくれ、おかげで遅れによる不安を鎮めることができた。食事時間は11:00~12:00、早かったが、そば中心のセットメニューは美味しく、適当だった。午前中の見学予定を食事後に回し、江川邸・葦山城⇒葦山反射炉⇒蛭が小島⇒三嶋大社・・・とし、遅れを取り戻すため各行程を多少端折ったが、すべてこなして小手指駅への帰着30分遅れで済み、有意義な一日を送れた。

■伊豆の国市史跡

1. 江川邸・・・12:00 から約1時間 ガイドの解説で邸内を一回り

1) 江川家と太郎左衛門

清和源氏の流れをくみ、鎌倉時代から伊豆の国に地盤を築いてきたのが江川家の祖である。幕末・明治までは37代を数える。特に有名なのが第36代江川太郎左衛門英龍で、父の英毅が長寿であったので、代官世襲は35歳（次男であったが長男が病弱で家督を継いだ）であったが、それから55歳で死去するまで20年間の事蹟を中心に展示しているのが江川邸である。江川家は世襲の代官として第26代から江川太郎左衛門を代々襲名した。武蔵を含む5か国の代官として9万石の領地を管轄した。江川家自体の石高は3000~5000石の旗本に相当する家録で、決して裕福ではなかったが近隣の開墾で石高を高め、また、酒造りなどで切り盛りした。徳川初期、お万の方を江川家養女として徳川家康の室入りの世話をした経緯などもあって特に厚遇を受け、井桁に16の野菊の花の紋所を家康から拝領している。武州世直し一揆の鎮圧出動したのは、英龍の後を継いだ37代若年の英敏である。

2) 江川邸のようすと役所跡

江川邸は解体修理を経ているが昔の佇まいを残した武家屋敷であるので、NHK大河ドラマ「篤姫」の薩摩の屋敷ロケと去年の「西郷どん」ロケと二度も使われている。



江川邸 表門

昔の役所の建物は現存しないが、竹垣の向こうの狭い庭に建っていた役所で、普段はそこで代官の執務をしていたという。庭では農兵の砲術訓練や葦山反射炉のミニ炉を作り実験をした。さらに、兵の携行用としてパン作りをした。なお、パンはここが日本におけるパン作り発祥地と認定されている。

母屋の建物の土間は高い天井の吹き抜けとなっていて、釘を一本も使わない構造、吹き抜けの頂点には日蓮宗を代々信仰した江川家を守る法華經の文言入り棟札が収められていると聞いた。兵学・砲術、医術など江川塾の中心学問だけでなく子供時代から父親の交友関係の有名人の影響を受けてとにかく多才な人であった。書、絵画、自画像、江川大明神の絵など素晴らしい才能を感じさせる。各種古文書、制作した鉄砲、自作刀剣など様々な貴重な文化財が展示されている。茶道史に有名な事柄では当家に立ち寄った千利休が庭にあった葦山竹を使って作った花入れ（レプリカ）もある。その他、大塩平八郎の乱の直前、大塩が幕閣を告発する文書を幕府宛て送付（幕府はこれを無視して返却した）した文書が展示されていた。それを諸々の事情で英龍が入手、その写しが江川邸の文書に加わった。庭には兵器展示、農具展示の蔵が2つあるほか、酒造に使った大きな古井戸、秀吉の小田原攻めの攻防で裏門に残った鉄砲の跡なども見学のポイントであった。

3) 英龍の人物像と江川塾、農兵訓練の影響

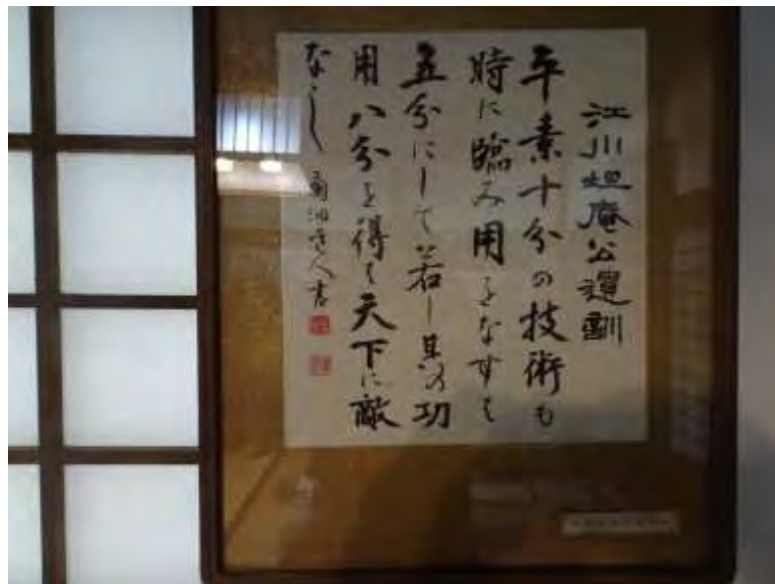
江川塾は表門が見通せる部屋で行われていたようで、佐久間象山を門下生第一号に、全国の藩士、近在の農民が集まった江川塾、その中には長州藩の木戸孝允、大山巖等の明治

時代を背負うリーダーがここに集っていた。渡辺先生はご研究で江川邸には二回訪問されたとお聞きした。

菰山代官 江戸屋敷の下積み時代に剣道の免許皆伝となったほか、蜚社の獄で知られる尚齒会グループ集会に出入りし、海防に目覚めたといわれる。母親の遺訓“忍”を生涯にわたって貫いた。また、女子への訓言まで及んでいる。

太郎左衛門は農兵を訓練した最初の人物で、長州藩の奇兵隊より早く、身分の違いを超えた時代の先駆けとなる考えをもった人物であった。菰山反射炉建造、お台場の設置、ロシアの難破船の代船「戸田号」の建造、管轄地域の見回り、近場の開墾等々忙しい日々、業績は多い。蘭学、海防に存分に才を発揮した英才。開国には前向きな人であった。

多摩地区でも英龍の関係者が剣道場を開き、農兵の訓練も行い、剣道を農村部まで流行らせたという。そうした風土から近藤勇や土方歳三が出ており、赤報隊の隊士なども輩出した。



江川 英龍 (担庵公) 遺訓

2. 菰山城の散策・・・13:00 過ぎから登って降りるまでを 30 分の強行軍。

1) 富士山の眺めが最高な山城。

菰山城は江川邸の裏門をでて、直ぐ近くの城、北条早雲が伊豆に侵攻すると江川家はすぐ家臣に加わり、それまで江川家が所有していた城の麓の砦を含め、付近一帯を早雲に寄進したと伝えられている。三の丸には権現神社があり、その脇は急な坂道、全員息を切らしながら登ると二の丸に至る。眼下に田方平野、その向こうには麓からトップまで富士山が拡がり、すばらしい眺めである。早雲もこの景色を朝晩眺めて過ごしたかなと勝手に想像をたくましくする。そこからさらに本丸まで頑張ってほぼ全員登頂した。本丸跡を含め菰山城と書かれたいくつもの赤旗が風になびいているだけであったが達成感があった。



菰山城 本丸跡、田方平野の向こうに富士山

2) 菰山城と後北条氏

北条早雲の伊豆侵攻を昔は下剋上、戦国時代の始まりであり、早雲は悪の代名詞のようにされていたように記憶している。近年の研究で、伊豆の堀越御所から茶々丸を追放して伊豆一国を領有し、戦国大名に名を連ねるようになったのは、室町幕府の三管領の一つ細川氏の意を受けて侵攻したとの見方が有力になった。

早雲が一国一城の主として持った城が菰山城で、相模に進出し、大大名として小田原城も領有したが、後半生には小田原城は長男氏綱に譲り、早雲は隠居し、菰山城を居城とした。しばしば城下や農村に足を運んだ際には菰山さまと呼ばれ、領民に慕われる存在であった。当時の年貢が武家：領民比 6 対 4、7 対 4 が常識的な時代にあって早雲は武家 4、領民 6 の民に厚い領国経営をしたので、慕われるのは当然と言える。なお、菰山城には秀吉との交渉役になった氏規ものちにはしばしば滞在した。

後北条氏の氏政、氏直の家系は断絶したが、氏規は家康からも信頼され生き残り、この家系は大阪、河内狭山藩として幕末・明治まで命脈を保った。

3. 菰山反射炉見学・・・歴史ガイドによる説明をうける

1) 反射炉のしくみを知る。

反射炉は燃焼の熱が楕円状に造られた壁に反射して一カ所に集中するようにした炉であった。数学でいう楕円の焦点と考えればよいようだ。燃料は石炭や木炭、鉄は砂鉄から燃



葦山反射炉のしくみ説明に聞き入る。

焼するのではなく、たたら半製品を使ったことを初めて理解した。鍋島藩の反射炉の成功はあるが、江川太郎左衛門は独力でこの炉を建設した。なぜL字型に2つの炉が作られているか裏に回って2つの炉からの銑鉄を一カ所に集める仕組みが分かった。

当時としては鉄の溶解状態は目で炉内の色をみて、取り出していたので夜に作業をしたという。今一つ理屈がわからなかったのが、どのように大砲の砲身の成型が行われたのか、説明ではクレーンでつりさげ成型したというが・・・？

大砲のくりぬきは水車の動力を旋盤運動に変えてくりぬいたことは理解できた。

2) 大砲のゆくえ

最初は短筒の青銅製のものも作った。これは射程距離が短いのであまり役に立たなかった。鉄製のカノン砲が展示されていたが後世のものという。造られた大砲はお台場迄船で運ばれ固定された。大砲は固定式の台に据えられたので、的が砲身方向に入らないと打てなかった。火薬は砲身から詰め込み、弾を込める。導火穴から火薬をまき、離れて火をつけた。当時の大砲はその後、日清・日露戦争ですべて新大砲に成型の為、鋳つぶされて一つも残らなかった。葦山反射炉は明治になると時代遅れになった。ヨーロッパを含め、反射炉は残っていないので、今や葦山反射炉は貴重な歴史遺産である。

4. 蛭が小島・・・葦山城からも近い。富士を仰ぎ見る頼朝・政子の立像

*今は公園として 20分の見学

蛭が小島のあるところは頼朝が配流された時代には、狩野川の中州にあり、文字通り蛭に吸われるほどの湿地帯にあった。江戸時代には用水が作られ、広い水田や農耕地に変化したことが、江川邸駐車場の地図に描かれていた。今年の台風 19 号は各地に甚大な被害を与えたが、この地方は狩野川台風と呼ばれる大水害をもたらした台風を私たちの年代は記憶している。その後の治水事業で現在のような蛭が小島になったのだらうと想像する。

頼朝 31 歳、政子 21 歳の夫婦が富士を仰ぎ見ている像があるだけ。蛭が小島であること記した石碑があると聞くが確認できなかった。それにしても尼將軍の政子とは程遠い初々しい像である。頼朝は伊豆に配流されたと記録されていて、蛭が小島と確定的に述べられていない。江戸時代の人がここだと示したのが 蛭が小島であるという。なお、北条時政・政子の北条屋敷はここから西へ約 1.2 キロ、狩野川の右岸地帯にあった。



蛭が小島 頼朝・政子と富士を見る。

■三島市・・・立寄り

5. 三嶋大社参拝

秋の夕はつるべ落とし、時間が気になる。三嶋大社では、頼朝の旗揚げの石碑（挙兵が目代の山木兼隆の油断をついたことを記した碑）や頼朝の支援者の一人安達盛長（比企尼の女婿）の警護・忠義ぶりを伝える案内版を確認するぐらいで、思い思いの自由参拝にとどめた。短時間の立ち寄りでバスの駐車料がもったいないぐらいであったが、素通りはやめた。頼朝は信仰心が強く、ここには再三、訪れている。伊豆の付け根の三島は沼津を外港として古くから上方と江戸、奥州との中継ぎ交易と東海道の宿場町として栄えた。



三嶋大社は伊豆七島の三宅島の神社(御島=みしま)が起こり、もともと航海の安全を祈願する祭神である。やがて伊豆半島賀茂郡に移転してから、今の三島に落ち着いたという。神社としての格式は高く、伊豆の一の宮、明治期は官幣大社であった。建物の屋根他に菊の紋が飾られている。

それにしても大変な格式や荘厳さを感じる神社、心身とも洗われた気分。静寂そのもの。

← 神池で見かけたカワセミ

6. ジャンボひものセンター 買い物と休憩

4時を回り、帰りが気になるが、ドライバーTさん、少し遅れても構わないので、ゆっくりしてくださいという。薄暗くなるまで、買い物と軽食をたのしんだ。

ここは東名高速のインターのすぐ近くで、遅くなっても観光バスが次々立ち寄る買い物スポット、駿河湾の幸や蜜柑など旬の産物を求める人が多い。帰りの高速は全く渋滞がなく、2時間と少しで帰れた。午前の渋滞遅れ以外、大きなトラブルもなく、無事帰れたことを感謝したい。

記 令和元年(2019)11月26日 小川雅愛

担 当 : 幹事会 主担当 小川雅愛 三島昭雄

写 真 : 大館徹 点呼確認: 大野孝 会計: 安田好子、近くの史跡(下写真): 小川

参考資料: 小説「江川太郎左衛門」(読売新聞社)、小説「北条早雲 1~5巻」(中央公論社)

「源頼朝」(中公新書)「鉄から読む日本の歴史」(講談社学術新書)「半島をゆく」(小学館)、「静岡県の歴史」「静岡県の歴史散歩」(山川出版社)ほか



上左 山木兼隆館付近、上右 その石碑 下左 江川家菩提寺本立寺、右 太郎左衛門墓地